つなぐ平和

「戦争を自分のこととして感じてほしい」。そんな思いから、苦い白黒の写真をカラー写真にする取り組みを、東京大学2年生の藤田香珠さん(19)と、東京大学大学院教授の渡辺英徳さん(46)が続けています。

1945年8月15日に長い戦争が終わり、あれから75年以上がたちました。平和がいつまでも続くように、私たちにできることは何か。一緒に考えていきたいと思います。

＝2面につづく

カラー化写真が伝える戦争

戦争中の1945年5月5日、焼け野原の中でこいのぼりをあげる子どもたち。白黒写真は共同通信の前身である同盟通信のもので、戦後の「こども日」にあたる端午の節句を祝っているとみられます

（カラー化・藤田香珠さん）

2021年５月９日付　さん太タイムズ

せんそうについて考えた

岡山市・ノートルダム
清心女子大付属小２年

荒井　生

「あっこいのぼりだ。」ぼくは、新聞のしゃしんに目がとまり、きじを読んでみました。それは、せんそう中のやけ野原でこいのぼりをよろこぶ子どもたちの白黒しゃしんを、人こう知のう（ＡＩ）でカラーかしたものでした。東きょう大学の先生が、せんそうを自分のこととしてかんじてほしいと、とり組んでいるそうです。しゃしんの色づけはＡＩの力だけでなく、せんそうを体けんした人の話を聞いて、それをもとに時間をかけて人の手で色を直していくそうです。はじめはせんそう中のしゃしんには見えなくて、ぼくはせんそうについてもっと知りたくなりました。

ぼくは、おかあさんから岡山でも空しゅうがあったことを聞き、岡山シティミュージアムへしらべに行きました。てんじを見て、ぼくの家のあたりもやけ野原になり、たくさんの人がなくなったことを知りました。でも、なによりせんそうのおそろしさが分かったのは、せんそう体けんのお話のどうがです。ぼくはいつまでもそのどうがを見ていました。

ぼくが行っているカトリック教会に、岡山空しゅうを体けんした人がいると聞いて、インタビューをしてみることにしました。その人は石川やさぶろうさんといい、５才の時に空しゅうにあったそうです。家ぞくとはぐれて、３才の妹をつれて二人でにげたと言っていました。船であさひ川をわたって後楽園へにげる時、ほかの船にしょういだんがおちてしずみましたが、石川さんの船はぶじでした。

石川さんは、せんそうはどうしておこるのだろうねと言いました。一ばんつたえたいことを聞くと、あいてを思いやる心を大切に、ということでした。ぼくは、どうして大人は、こんなおそろしいせんそうをするのかと考えました。ぼくも、あいてを思いやる心を大切にしたいです。みんながそうすれば、へいわなせかいになると思います。

(C)山陽新聞社　無断複製・転載を禁じます。